



2013年6月19日放送

漢方を理解するための10処方

日本漢方振興会漢方三考塾 講師 高山 宏世

(4) 小柴胡湯 (しょうさいこうとう)

この処方のキーワードは「少陽病を和解」

弁証のキーワードは①往来寒熱、②胸脇苦満、③弦脈です。

(どんな処方か?)

小柴胡湯という薬は外から来る外邪に侵されて発病する外感病初期の太陽病の時期を過ぎ、次の少陽病と呼ばれる時期に専ら使用される処方です。

少陽病は太陽病がその段階で治癒せず、その俣移行して来る場合と、太陽病の後も高熱が持続する陽明病の時期を経由して、其の後で少陽病に移行する場合とがあります。少陽とは足胆経と手三焦経で、それぞれ足厥陰肝経、手厥陰心包経と表裏の関係にあります。少陽経脈は背中を走る太陽経、腹部を走る陽明経の中間の身体の側面を走行しています。太陽経が表に在って陽気を外部に開いて発散し、陽明経が裏に在って陽気を受納して閉じるのに対し、少陽経は外の太陽と内の陽明の間に位置して両方と交通し、陽気を全身内外に通達させる役割を果たしているため、少陽は「樞」(扉を開閉させるちょうつがい)であり、「半表半裏」に位置すると言われています。

(小柴胡湯の原典)

原典である『傷寒論』『金匱要略』の条文から小柴胡湯の作用機序とその証候を理解した

いと思います。

少陽病に特有の症状を原典に従って列挙しますと、

「傷寒5, 6日、中風、往来寒熱、胸脇苦満シ、黙々トシテ飲食ヲ欲セズ、心煩喜嘔ス。或ハ胸中煩シテ嘔セズ、或ハ渴シ、或ハ腹中痛ミ、或ハ胸下痞鞭シ、或ハ心悸シ、小便利セズ、或ハ渴セズ、身ニ微熱有リ、或ハ咳スル者ハ**小柴胡湯**之ヲ主ル」(傷寒論、太陽病篇第96条)。

1) 少陽病は病邪が少陽経脈が走る胸脇部にあり、正気と邪気が表裏の中間で相争っている時期です。両者の力関係は一進一退を繰り返しています。正気が勝れば発熱し、邪気が勝れば悪寒を生じるので、病人は発熱と悪寒が交互に出現する「往来寒熱」という熱型を示します。

これに対し太陽病の熱型は発熱悪寒で熱と寒気は同時に現われます。陽明病になると但熱無寒で専ら高熱が持続し原則として寒気はありません。

2) 少陽経脈は脇の下から側胸部を走行しているので、少陽経に邪が宿ると少陽経脈の走行に沿った胸の脇から季肋部・みぞおちにかけて重苦しい感じ、或は腹診した時その辺りに抵抗や圧痛を覚えます。これを「胸脇苦満」と云い少陽病に特有な証候の一つです。

3) 少陽病になると、肝胆が主る疏泄作用が失調するので、気分が晴れず抑鬱感を自覚するので「黙々トシテ」という気分になり、次に肝と最も密接に関係する脾胃の正常な働きを阻害するので「喜嘔シ飲食ヲ欲セズ」と原典に書かれた症状が出て、胃気が上逆するので胃が重苦しく、吐き気がして食欲も減退します。また肝胆の気が鬱結すると湿熱を生じ、それが心を上擾すると胸中に煩熱を生じて「心煩」し、その他、口が苦い、咽が痛い、眩暈がする等といった症状を伴うこともあります。

4) 「少陽ノ脉ハ弦」といって、少陽病では丁度弓のツルや弦楽器の弦をピンと張ったような堅い真っ直ぐな脉が特徴的です。弦脈は陽脈の一種で、五臓の中の肝の脉とされ、肝と関係が深い少陽病では必ず弦脈が現われます。弦脈はその他、寒冷や痰飲でも現われます。

その他、少陽病の舌質はやや紅で白い舌苔があります。

小柴胡湯は少陽病を治療する際の最も中心的な処方なので、少陽病と診断する根拠になる症状や所見(証候)はその俣**小柴胡湯**の使用目標になります。

次に「婦人中風7, 8日、続イテ寒熱ヲ得、発作時有り、経水適々断ツ者ハ此レ熱血室ニ入ルト爲ス。其血必ズ結スガ故ニ瘧状ノ如ク発作時ラシム。**小柴胡湯**之ヲ主ル」(傷寒論、太陽病下篇144条)。

血室とは子宮を指し、外感の邪熱は三焦を通じて血室に侵入することがあります。これを「熱入血室」と称しています。「肝ハ血ヲ藏ス」といって肝は全身の必要な場所に必要なだけの血液を供給する役割を担っており、血室とは直結しています。熱入血室を生じると月経予定でないのに月経が発来したり、逆に月経中なら中断したりします。また血室中の

血と邪熱が結合するので、高熱を発したり、精神錯乱を生じたりしますが、この場合も肝が深く関係しているので**小柴胡湯**で治療します。

「諸黄、腹滿シテ嘔ス者ハ**柴胡湯**ニ宜シ」(金匱要略、黄疸病篇第15)

黄疸は胆から排泄される胆汁が鬱滞して皮下に逆流したものであるため、**小柴胡湯**で胆の働きを正常化してやります。

(小柴胡湯の処方構成)

少陽病は太陽病の汗法や陽明病の瀉下法などの治療は禁忌で、病邪を直接中和・清解して治す和解と云う方法を用いて治療します。**小柴胡湯**は和解薬の代表です。

君薬は柴胡で、少陽病半表半裏のうち半表に在る邪熱を外に排除する一方、肝の気滯を散じ肝気鬱結を治します。柴胡は配合する生薬により多彩な働きを現わします。

臣薬は黄芩で、半表半裏の半裏にある邪熱を消炎・解毒・清熱する作用を現します。少陽病の治療に際して柴胡と黄芩は常に配合して用いられます。

佐薬は半夏・人参・甘草の3薬です。半夏は生姜と配合して少陽病に特有の嘔気を治します。人参・甘草は脾胃を保護して正気を補い病に対する抵抗力を高めます。

使薬は生姜と大棗で、生姜は半夏と共に降逆止嘔、大棗は人参・甘草と共に正気を養うのを扶けます。

(小柴胡湯の臨床応用)

漢方医学では「肝は疏泄を主る」といい、肝が全身の気の流れを促進・調整していると教えています。気はエネルギーであり働きですから、肝の疏泄作用が正常に行われれば五臓六腑や諸器官は皆円滑に働き、全身は活発に動きます。肝の疏泄が失調すると気は肝に鬱積して肝気鬱結を生じて全身の気の流れに異変が起り、症状的には胸脇苦満が現われます。肝気鬱結は少陽病だけではなく、精神的ストレスやその他の原因で肝の疏泄が阻害されても生じます。**小柴胡湯**は肝気鬱結を解消し肝の疏泄作用を正常に戻すように働くので、外感病の少陽病だけでなく、種々の原因に因り肝気鬱結が生じて起る内傷雑病を治すのにも用いられます。具体的な**小柴胡湯**の臨床応用例は

1) 急性発熱性疾患の扁桃炎・副鼻腔炎・咽喉炎気管支炎・気管支炎・胸膜炎・胆嚢炎などに広く応用されます。症状や部位に応じて適当な漢方薬を加味或は合方すると応用範囲は更に広がります。細菌感染に対して抗生剤との併用は治療効果を高めるという報告があります

2) ウイルス性の急性肝炎或は慢性肝炎で肝気鬱結が強い例に対しては有効です。肝硬変の時期には無効でむしろ有害です。

3) 漢方では肝胆と脾胃即ち消化機能とは密接に連繫しています。熱証傾向の胃酸過多、胃機能障害、糜爛や潰瘍などにもよく用いられます。

4) 精神的ストレスなどで肝気鬱結を生じ、抑鬱気分や心身症的不調を生じた場合にも本方は有効です。

小柴胡湯は『傷寒論』中にも「柴胡ノ証有レバ、但ダ一証ヲ見セバ便（すなわ）チ是也、必シモ悉クハ具エズ」（101条）とあるように、症状に捉われず病人の証をよく考えながら使えば、最も応用範囲の広い処方の一つです。少陽和解の主方ですが、幾つかの加減方があり、邪の位置や虚実に応じ使い分けます。例えば、太陽病から少陽病への移行期なら**柴胡桂枝湯**、さらに脾虚で神経質の者は**柴胡桂枝乾姜湯**、病位が陽明胃にもかかり、少陽病と陽明病の両方にまたがり、心下満して微かに煩悶し便秘傾向の者は**大柴胡湯**、邪が少陽を中心に太陽・陽明まで三陽にまたがり、全身が重も倦く動悸や不眠・抑鬱などの心身症状を伴うときは**柴胡加竜骨牡蠣湯**といった具合です。